

橋本 崇 著

『偶然性と神話—後期シェリングの現実性の形而上学』

(東海大学出版会、1998年)

杉山 文彦

『偶然性と神話』と題されたこの書は、副題に「後期シェリングの現実性の形而上学」とあるように、シェリングを中心に論じたものである。ただ第二章でシェリングと対比させる意味で、近代日本の哲学者九鬼周蔵がとりあげられており、これがこの書物の構成に重要な役割を果たしている。『偶然性と神話』という一寸わかりにくい表題もここに由来するものと思われる。すなわち、シェリングに多くを依拠しながらも、結果としてはシェリングとは異なる「偶然性の哲学」を形成し、偶然性を見据える中から東洋的悟りへ至ろうとした九鬼周蔵と、世界各地の神話の中に歴史の躍動の諸相を見出し、そこに存在の根源的現実性を見たシェリングとを対比させることを通して、両者の哲学の今日的意義を問うとともに、東西文明の比較まで視野に入れた著者橋本崇氏の意図が、この表題に現われていると思われる。

ところで、この書評を書いている私は、中国近代思想・日中関係専攻ということで、シェリングにも九鬼周蔵にもズブの素人である。そんな私がこの書評を書く気になったのは、同僚である橋本氏より本書を一冊いただいたこと、そしてそれを楽しく読ませてもらい、専門的なことはわからぬながらも、いくつか考えさせられることがあったからである。門外漢による一知半解の書評など、おこがましいといわれそうだが、かといって哲学者同士が述語のキャッチボールを繰り返していたのでは哲学はなんのためにあるのかということにもなろう。専門家による書評と同様に門外漢のそれにも一定の意義はあるだろう。

さて、橋本氏によれば、シェリングも九鬼も「なぜそもそも何かがあって、何も無いのではないのか」という問いを問い続けた哲学者だということである。いきなりこんな風に切り出されると「そんなこと関係ないや」と言いたくなくなってしまうが、よく考えてみるとこれは案外重大な問題である。生ある者として我々は、いずれは死を迎えねばならない。つまり、存在(生)から非存在(死)へと移行しなければならない。ところがこの移行がなかなか難物である。だから世の中には存在と非存在について考える部門が必要になるのである。それは、現代社会にコンビニや不動産屋が欠かせないのと同じ事情である。何も知らずに不動産屋へ行けば騙されるかもしれない。哲学や宗教だってそれと同様、近くはオウム真理教の例もある。やはり少しは知っておかねばまずい。

本書も哲学書の例にもれず、のっけから「そもそも何かがあって……」といった調子で、あまり取っ付きやすい読み物とはいえない。それでも以下のようなことは、我々素人でも読み取れる。「何かがあって……」という問いに対しシェリングも九鬼周蔵も「原始偶然」ということを考えているらしい。これは平たく言えば世界が始まるにあたっての「始めの一步」といったところだろう。ここまでは二人とも同じ。しかし「原始偶然」の意味づけが違う。九鬼にとって「原始偶然」は我々をとりまく宇宙の構造を論理的に説明するための道具なのであって、

過去のある時点に存在した「始めの一步」なのではない。むしろ具体的な存在者に満ち溢れている現在が、同時に別の側面から見れば「原始偶然」そのものである。したがって、シェリングが「原始偶然」の展開として重視した神話も、九鬼から見れば、説明用の寓意にすぎないことになる。この九鬼の見方は、すぐれて東アジア的であるといえよう。東アジア文明圏の伝統では、時間は始まりも終りもなく続くとともに、過去も未来も現在という一点に垂直に凝集される。「一切即一、一即一切」である。この先にあるものは、おそらく東洋的な「悟り」であろう。

これに対し、シェリングにおいては「原始偶然」は過去のある時点に実際にあったことであり、その具体的展開を詩的に表現したものが神話である。そこには楽園からの追放に代表されるような、分裂・対立・融合・発展を含む壮大なドラマが展開する。時間は開始から終了に向かって、ある方向性をもって発展する。こうなると私などはここに近代ヨーロッパの強さと恐ろしさを見る思いがしてくる。ヨーロッパは常に発展する。それは彼らの時間概念がそうになっているからである。しかし同時にそこからは、ファシズムの軍靴の響きや社会主義前衛党の鉄の規律も姿を現わす。歴史が方向性をもっているならば、その方向性にそったものが正義となり、そわぬ者が悪ということになりかねない。しかし歴史の方向性とは、そんなに簡単に見えるものなのか、いや歴史とはそもそも発展するものなのか。

以上が、シェリングにも九鬼周蔵にも素人の私が【偶然性と神話】から読み取ったことのあらましである。こうしてみると、私が読み取ったものは、東西の哲学に関する一般論であって、シェリングにも九鬼にもあまり関係ないとも言えそうである。おそらく著者の橋本氏に御満足いただける読み方とはなっていないであろうが、これはこれで私なりに読書の効用は十分あったような気がしている。